高齢者の余暇参与傾性要因に関する研究

秋田, 山梨, 高知県老人クラブの調査から

深澤 宏¹⁾

抄 録

1994年の厚生省の報告によれば、日本人の平均寿命は男性、76.25歳、女性82.51歳と世界一となっている。しかし、このような高齢者の平均寿命の増加に伴い、寝たきり、痴呆症、自殺などの増加が高齢社会に多くの社会的問題を引き起こしている。

この研究は高齢者の余暇活動参与を規定する要因を明らかにすることである。

秋田, 山梨, 高知県の60歳以上1170名に対する調査を実施し、林の数量化Ⅱ類により、余暇活動の参与程度を従属変数とし、それに影響を与えていると考えられる11変数を独立変数として分析した。

その結果、高齢者の余暇に影響を与えていると考えられる次の7つの要因が、判別の中率64.9%、相関比0.337で明らかとなった。

- (1) 生活満足度 (カテゴリ・スコア・レンジ=0.64)
- (2) 学歴 (レンジ=0.42)
- (3) 性別 (レンジ=0.24)
- (4) 体力 (レンジ=0.22)
- (5) スポーツ実施 (レンジ=0.22)
- (6) 余暇是認尺度 (レンジ=0.21)
- (7) 健康状態 (レンジ=0.21)

従来言われていた、「金」「暇」は、高齢者の余暇参与には若い人達ほど強い要因にはなっていないことが明らかとなった。今後、高齢者の余暇活動を豊かにするためには、余暇を行うのに十分な生活全般の内面的な満足や体力、健康度や余暇に対する是認的態度、幼少期からの多様な余暇活動が必要であることを示唆している。

キーワード：高齢化社会、高齢者、余暇活動、林の数量化Ⅱ類、

1) 秋田大学教育学部, 教授

A Study on the Inclination Factors for Participation in Leisure Activities for the Aged

Hiroshi Fukasawa¹⁾

Abstract

According to the report by the Welfare Ministry in 1994, the average life expectancy of the Japanese keep the highest in the world with 76.25 for males, and 82.51 for females. The increase in the life expectancy of the aged, however, is causing many social problems accompanied by the aging society, such as the increase of the bedridden, the dementia and suicides.

The present study aims at clarifying the factors of the participation in leisure activities of the aged.

A survey was made in the form of a questionnaire to 1,170 persons above 60 years old in Akita, Yamanashi and Kochi Prefectures. The data was analyzed according to Hayashi's quantification theory II, with the quantity of leisure activity as a dependent variable, and 11 variables affecting it as independent variables.

The result proves that the following seven variables constitute the most influential factors for leisure activities of the aged with the 64.9% of the discriminant hit ratio and the 0.337 of the relative ratio:

- (1) degree of the contentment in dairy life (category score range = 0.64)
- (2) education background (ditto = 0.42)
- (3) gender(ditto = 0.24)
- (4) physical fitness scale(ditto = 0.222)
- (5)practice of sports(ditto = 0.22)
- (6)leisure admission scale(ditto = 0.21)
- (7)health condition(ditto = 0.21)

Money, free time in leisure activities for the aged, described in the previous study, was not so strong factor as younger people .

This study showed the necessity of the participation in various leisure activities from younger days, the maintenance of physical fitness and health and positive attitudes toward leisure activities, in order to enrich the leisure activities of the aged in future.

Key words: aging society, people of advanced age, leisure activity, Hayashi's quatification theory II

1) College of Education, Akita University, Tegata-Gakuenmachi, Akita City, 010

I. 研究目的

「高齢化社会」から「高齢社会」への移行は21世紀を待たずに訪れつつある。厚生省が発表するわが国の平均寿命は毎年のように伸び、男女ともに世界最高を維持し続けこの傾向に拍車をかけている。しかし、高齢者の余命の増加や少子化傾向に伴う高齢社会の出現によって、余暇を楽しむどころか、寝たきり老人、痴呆症、自殺の増加など高齢化社会にともなう多くの問題が社会問題化しつつある〔我孫子他, 1990:204-240; 安食他, 1978:12-52〕。高齢者の余命期間に充実した余暇時間を過ごせるかどうかは「生活の質」に及ぼす影響は大きいものと考えられる。折原等は高齢者の社会への関与の程度(social integrity)と死亡率との間に関係があり、男性では社会参加の少ない人では多い人の2.44倍、女性では2.81倍、死亡率が高いことを指摘している〔折原, 1992:346〕。余暇活動は一人での時間つぶしも考えられるが、基本的には仲間を必要とし、このことから社会参加という点で有効な活動となることが期待される。レジャーが自由時間に行う他者に強制されない活動であることから、全く同じではないにしてもホイジンガーやカイヨワの言うプレーに共通したレジャーの機能が考えられる。すなわち、ホイジンガーはプレーの基本的な機能として、「何かのための闘い」か「何かの表現」の二つをあげている〔ホイジンガー, 1949:32〕。しかし、「高齢者は一般に自己の健康や余暇活動の権利をあまり主張しないようである。その理由として、自分の健康状態が病的となる時点に気づかないことと、自分がもう年であると諦める受動的な態度を選びとっていることの二つの理由による」〔ボーヴォワール, 1972:訳書333-337〕、とも言われているように高齢者の余暇活動を促すことは、若者や壮年者のそれよりも、難しいと思われる。さらに、エリクソンは「寿命の伸びによって追加される健康な年月の質は全ての高齢者に対し劇的に向上し得る可能性がある。しかし、このような質の向上は、現在

40歳代、50歳代の人達が自分たちの老年期を生き生きと関わり合いたいと望むならば、前もって計画しなければならない」と高齢期の質的に高い生活が、成り行きまかせでは実現しないことを警告している〔Erikson, 1986:295-296〕。従って、このような生活の質を考えた老後の自己実現にとって欠かせない余暇活動にどのような要因が関わっているかを知ることは今後のスポーツ社会学にとって重要な研究課題となろう。

ここ数年の間に、日本における高齢者の余暇活動に関して、スポーツ社会学分野での研究について概観すると特に高齢者の余暇のうち、スポーツと関連させた研究が盛んになってきた。

山口は「これまで高齢者のスポーツ活動を測る基準は活動頻度、すなわち量であったが、今後は質的側面(楽しさ、満足度等)がもっと重視されるべきであり、たとえば、ゲートボールという単一スポーツ種目だけでなく、余暇におけるスポーツ活動の多様性が必要である」点を指摘している〔山口, 1988:507-513〕。さらに、生涯スポーツの研究基盤としてライフ・サイクル理論が有効であり、その場合、人間の生理的・心理的発達や年齢要因だけでなく、社会的地位、役割行動、スポーツ環境要因を考慮すべきことを指摘している〔山口, 1994:66-69〕。沢田は50歳代以前と60歳以上について、運動やスポーツの実施について、影響を与えている変数について数量化Ⅱ類により分析し、60歳以上では、休暇の形態、クラブ活動経験、家庭の状況、体力評価の順であることを指摘しているが、説明変数の選択については今後の課題としている〔沢田, 1989:129-142〕。高齢社会における体育学の役割について、日本体育学会(平成7年)シンポジウムが行われた。宮下はウォーキングを継続して続けることの難しさをあげ、やめていく人々を引き留める点に体育学のなすべき仕事があるとしている。宮下は運動の習慣化の重要性を指摘しながらも、その運動はあくまでも個人の健康に寄与する手段としての運動の奨励をめざしている〔宮下, 1995:62〕。荒井は、同シンポジウムにおいて、宮下とは

対照的に、従来の体育学がメッセージとしての体育学であったことを提案している。すなわち、従来の体育学が運動を「運動をしないと病気になるという脅迫的メッセージによっており、迎えつつ高齢社会は脅迫の度合いを薄めれば良いのであろうか」と批判し、異なるメッセージの原則を打ち出すことを提起している[荒井, 1995:63]。土肥は現在の高齢者と異なった価値観を持つ中年者層の余暇生活の現状と彼ら的高齢期における余暇イメージとの関連を検証し、余暇活動内容に性差が認められ、余暇活動満足度は「友人や仲間との交流」に対する満足度が高いこと、自然、健康、創造的活動などに対する期待が高いが、高齢期の余暇活動に対して漠然としたイメージを抱いており、積極的な意味付けは行っていないこと、余暇活動量や余暇満足度が高いもののほど余暇イメージも肯定的であることを指摘し、中年期の余暇活動の満足経験が高齢期の余暇生活を支える重要な要因となると共に、余暇活動の退職以前の余暇学習が有効である可能性を指摘している[土肥, 1995:1MO1-5-1MO-6]。高見は、J.ケーリー[Kelly, 1987:189-200]らやモビリー[Mobily, 1987:155-180]らの先行研究を参考に61項目からなる調査票により、高齢者の余暇生活の現状を性差を中心に分析し、スポーツ・娯楽では男性が、趣味・創作活動では女性が多く実施していること、余暇活動量が多いもののほど、現在の余暇満足度は高く、余暇イメージも肯定的であることを指摘している[高見, 1995:1MO2-5]。土肥、高見等の研究から、高齢者の余暇活動が量的な要因(活動の種類、回数の多さ)と質的な要因(余暇生活の満足度、余暇の肯定的態度など)と相補的な関係にあることが予測される。

長見は中年者(40・50歳代)と高年者とは、スポーツ・キャリアパターンに違いが見られ、その一因に高年者が在学時の定期的なスポーツ参加に恵まれなかったことと「健康・体力」上の理由をあげている[長見, 1992:4-6]。宮内は「中高年スポーツ参加者の現状と問題」について、スポーツ・レクリエーション祭参加者の学歴が同世代より高いこと、「仕事重視

派」よりも「仕事と余暇を同等に考える者が多かったこと」を指摘している[宮内, 1992:4]。長見、宮内等の調査結果は、対象者がレクリエーション祭参加者という限定はあるが、中高年者のスポーツ参加規定要因に学歴や余暇観、健康・体力、性別等の影響がうかがえる。

以上のように、先行研究を検討した結果、日本における高齢者の余暇についてはまだ緒に付いたばかりと言える。余暇活動にしめるスポーツ活動の位置づけのみでなく、余暇を規定する緒要因に関する研究の積み重ねが必要と思われる。

ところで、余暇活動を支える要因として、成人一般を対象とした調査から、従来、「金」「暇」「場所」などが重要な要素として指摘されている[深沢, 1983:68]。しかし、高齢者の余暇活動を支える基本的な要因を考える場合、これらの指摘は必ずしも当てはまらないことが予測される。青少年や成人一般の余暇活動が「金」「暇」「場所」などのような比較的、外面的な要因に左右されるのに対し、高齢者の余暇を考える場合は高齢者という人生の終末期に到達した人のライフ・ステージを無視してはならない。例えば「暇」について言えば、高齢者の多くは退職し、自分で自由に使える時間は一般成人より多いというような特殊事情が考えられるからである。本論はこのような高齢者の社会・心理的背景を考慮しながら、高齢者の余暇活動への参加を弁別している要因を探ろうとするものである。

Ⅱ. 研究方法および分析枠組み

調査対象と方法

1990年9月より1991年2月にかけて、秋田、山梨、高知各県の社会福祉協議会、及び老人クラブの協力を得て、質問紙を配布・回収する留置法により調査(一部面接調査)を実施した。(注:調査対象都道府県は、本来大がかりな調査では、多段階化法等によるべきであったが、調査協力者の有無や限られた予算と期間等により、便宜的に東北・北海道地区、中部地区、九

州・四国地区を想定して選択した。) 調査対象地域は、市街地、商業地、農村、山村、漁村(山梨を除く)から合計40地域の市町村を無作為に抽出した。調査票を60歳以上の男女合計1210人に配布し、1170人より回収した(回収率97%)。そのうち有効回答は1015人である(有効回答率84%)。有効回答数の内訳とその属性を表1に示す。居住地域は都市部以外の地域が多い。性別は秋田で男子がやや多い。年齢構成は秋田、山梨、高知のいずれの地域においても70歳以上が半数以上を占めている。老人クラブへの加入者も多い。世帯構成は高知で「配偶者と二人だけ」の世帯が最も多いが、秋田と山梨では「配偶者と子供夫婦」の世帯が最も多い。生計比の出処は年金によるものが最も多い。

表1 有効回答者数内訳

項目	選択肢	高知県	秋田県	山梨県
居住地域	合計=1015	319 (31.4)	309 (30.4)	387 (38.1)
	都市部	112 (35.1)	63 (20.4)	137 (35.4)
	その他	207 (64.9)	244 (79.0)	250 (64.6)
	不明		2 (0.6)	
性別	男子	174 (54.5)	198 (64.1)	171 (44.2)
	女子	132 (41.4)	110 (35.6)	210 (54.3)
	不明	13 (4.1)	1 (0.3)	6 (1.6)
	不明			
年齢構成	65歳未満	48 (15.2)	53 (17.3)	22 (5.7)
	65～70未満	66 (20.9)	77 (25.1)	59 (15.4)
	70～75未満	102 (30.2)	94 (30.6)	108 (28.1)
	75歳以上	100 (31.6)	83 (27.0)	195 (50.8)
	不明	3 (0.9)	2 (0.7)	3 (0.8)
老人クラブへの加入	加入	263 (82.4)	268 (86.7)	354 (91.5)
	非加入	63 (16.6)	39 (12.6)	33 (8.5)
	不明	3 (0.9)	2 (0.7)	
世帯構成	一人	48 (15.0)	10 (3.2)	31 (8.0)
	配偶者と二人	140 (43.9)	72 (23.3)	108 (27.9)
	配偶者と子ども夫婦	67 (21.0)	127 (41.1)	137 (35.4)
	自分一人と子ども夫婦	33 (10.3)	54 (17.5)	79 (20.4)
	その他	26 (8.2)	41 (13.3)	29 (7.5)
	不明	5 (1.6)	5 (1.6)	3 (0.8)
生計費の出所	恩給	43 (13.5)	26 (8.4)	65 (16.8)
	年金	230 (72.1)	210 (68.0)	263 (68.0)
	子どもの仕送	7 (2.2)	12 (3.9)	36 (9.3)
	給料	16 (5.0)	29 (9.4)	15 (3.9)
	その他	33 (10.3)	54 (17.5)	53 (13.7)
	不明	20 (6.3)	12 (3.9)	15 (3.9)

調査票の質問項目は全部で45項目あり、余暇時間、余暇活動の種類については、その内容と質問形式を那須等の調査研究報告書を参考にしている[那須, 1987, 124-125]。

調査票をまとめると次の5領域になる。

調査票内容

1. 基本的事項…居住地域、性、年齢、学歴

(1, 旧制小学校, 2, 旧制中, 新制高校, 3, 旧制高校・高等専門学校, 新制短大, 高専, 4, 旧制大・新制大・大学院 5, その他), 世帯構成, 仕事の有無, 所得

2. 余暇活動について…余暇時間(平日, 休日), 余暇活動の種類(表2に示された19種類), 特に力を入れている活動, その活動を始めた年齢, 重要な他者, 今後やりたいと思う余暇活動

3. 健康や体力について…本人の健康, 体力, 運動への心がけ, 生活満足度

4. 余暇は認度(後述)…10項目の余暇に対する意見を4段階尺度で回答

5. 余暇としての運動・スポーツ経験について…1年間の運動・スポーツ経験, 種目, 重要な他者, 過去の運動経験)

分析枠組み

高齢者の余暇を考える視点

青井はエリクソンを基に老人の社会化について『『何事かをする人, doing』から『人間になる, becoming』こと, さらに『あるがままの自分になる, being』』と述べ, 老衰は一種の「幼児期への回帰」であるが, 完全な意味での幼児回帰ではないとしている[青井, 1975:80-82]。青井の説によれば, 最終的に高齢者は存在すること(being)に意義があり, 何かの目標に向かって成し遂げることや相手とはげしい競争することは不向きとなり, 人生の最終段階に入った高齢者の余暇のあり方に一つの示唆を与えている。高齢期の心理・社会的特質についてエリクソンは統合(Integrity)と失望(Despair)という言葉で対にし, その時期の特徴を英知(Wisdom)としている。この英知は, 高齢者の余暇活動の特徴を考える場合抜きにすることは出来ない。英知について, エリクソンは次のように定義している。

(高齢者が)死に向かい合ったとき, 英知は生命それ自身とは切り離され, 衰えゆく精神機能にもかかわらず, 英知によって, (人生の)統合した経験を伝え, 維持するのである[エリクソン, 1986:37-38]。

青井はエリクソンの「Integrity」について、次のようにまとめている。[青井, 1975:80-82]

(1) 人生の偶然性の認知, (2) 責任をもって諦める能力, (3) 人生の総括的把握, (4) 無執着と超越性の獲得

さらに、青井は青年期までの発達課題は「Identity」の確立の時期であり、青年期以後の過程は「Identityの再定義」であり、人の出生（仲間入り）から青年期までと向老期から死（別れ）までとは、ちょうど対照的な性格を持っているとし、次の三点をあげている。

青年期まで

向老期以後

1) 身体的成熟	←→	身体的衰弱
2) 社会的関心の拡大	←→	社会的関心の縮小
3) 未来の展望の獲得	←→	未来の展望の喪失

高齢者の余暇活動は最終的にはエリクソンや青井の説から、単なる若い時期の余暇活動とは異なった意味を模索する必要がある。若者のような活発なはげしい身体活動を伴うスポーツやたくさんのお金をかけた豪華な活動などは不向きと言える。それは前述のような高齢期の心理・社会的特性から考えられる。人生に対する超然とした態度、今まで過ごしてきた人生の回想、身体的・精神的な衰えにもかかわらず社会との生き生きとしたかかわり合いが人生を充実させることになろう。高齢者の余暇活動への参与は、エリクソン等の言う心理・社会的な両方の変数を取り入れた社会的学習理論によるス

ポーツへの社会化理論の応用が考えられる [Kenyon & McPherson, 1973:303-332]。すなわち、余暇への社会化、余暇参与者の役割取得と考えられる。しかし、高齢者の余暇への社会化は、高齢者自身が既に社会化の時期を過ぎ、むしろ脱社会化の時期であり、時間やお金などの外在的な側面よりも、個人の心理、情緒的側面が強く働くと考えられる。ケニヨンらの社会化理論から、余暇活動を分析する研究枠組みは、余暇活動への参与傾性を目的変数（従属変数）とし、この目的変数に影響を与えていると考えられるいくつかの説明変数（独立変数）を特定することである。余暇参与傾性とは、人が余暇活動にどの程度参加し、また今後どの程度参加する可能性があるかを量的に測定し、さらにこの量的データを余暇参与傾性活発群と不活発群の2つのカテゴリーに質的に分けた概念である。具体的には余暇参与傾性の活発群と不活発群を分ける方法は次のような手続きによった。過去1年間の余暇活動を見るため、表2の余暇活動から、「あなたは、この1年間にどんな余暇活動をやりましたか。表の中からいくつでも選んで下さい」という質問項目に対する複数回答の数（過去1年間の余暇活動数）と「同じ表の中の余暇活動のうち、今後やりたいと思うのはどれですか。現在やっているやっていないにかかわらずあてはまるものを、いくつでも選んで下さい」という、複数回答の数（今後やり

図1 分析枠組み

たいと思う余暇活動数)の合計を余暇参与傾性尺度とした。(例:過去1年間の余暇活動数8種類、今後やりたいと思う余暇活動数が2種類の回答者の余暇参与傾性尺度は、10点となる)

この余暇参与傾性尺度の平均が8点であったことから8点以上を「活発群」とし、平均より少ない8点未満を「非活発群」とし、このような余暇参与傾性尺度を外基準とした。(以後、略して、余暇尺度とする)余暇尺度の算出方法は、余暇参与に対する積極性を計る簡便な方法として試行的に用いたが、今後、もっと適切な方法が考案される必要がある。従って、本論は林の数量化Ⅱ類を用い、余暇参与傾性活発群と非活発群を外基準として、それを判別していると考えられる説明変数を明らかにする予備的研究といえる。分析枠組みは図1のように表される。

11個の説明変数選択については、まず、余暇参与尺度と説明変数と考えられる質問項目とのクロス集計結果から、有意水準5%以上で有意差のあった7項目の他に質問票で求めた質問項目の内、説明変数となり得ると考えられる11項目を加えた18項目を数量化Ⅱ類にかけ、その結果、レンジの低い順に数項目を除き、再度、数量化Ⅱ類にかけ、これを数回繰り返す、最終的に11項目を説明変数として選択した。その結果選択された説明変数は、次のようになった。

1) 性別、2) 余暇に対する是認的態度、3) 学歴、4) 健康、5) 体力、6) 生活満足度、7) 年間所得、8) スポーツ活動、9) 余暇時間(平日)、10) 居住地域、11) 仕事の有無

説明変数の具体的な質問内容及び得点化は次のような方法で行った。

余暇是認尺度とは、どの程度余暇を許容、是認しているかの価値尺度を意味する。今回用いた測定表はリックランド等の考案した「余暇態度尺度」(leisure attitude scale)を日本の実状に合うように翻訳(休暇の長さが原文では4週間であったが、日本の現状ではすぐわないため3週間とし、レジャーでは理解できないので気晴らしとした等)したものを用いた

[Crandall, R., 1979:19-24]。次のような余暇に対する10項目の意見に対する4段階尺度による回答結果の合計得点とした。

余暇態度尺度質問内容

- 1) 気晴らしは、私にとって一番楽しい時間である。
1, 大いに賛成 2, やや賛成
3, やや反対 4, 全く反対
- 2) 私は、気晴らしをしているとき、うしろめたい気持ちになる。
1, 大いに賛成 2, やや賛成
3, やや反対 4, 全く反対 (以下同)
- 3) 遊んだり、楽しんだりすることは、悪いことである。
- 4) 近ごろ、日本人は遊びすぎていると思う。
- 5) 気晴らしや、楽しみこそが人生の生き甲斐である。
- 6) 私は、遊びや楽しみ方が下手な方である。
- 7) 人は、生活の中に遊びや気晴らしを大いにとり入れるべきである。
- 8) 私は、一年に少なくとも一回は、3週間のまとまった休暇をとりたい。
- 9) 人は、気晴らしや楽しみに熱中すべきではない。
- 10) 人は、気晴らしや楽しみをする事を誇りにして良い。

学歴:調査票では、5つのカテゴリーに分けて質問したが、調査結果では、旧制小学校卒業者が51.3%と多かったことから、このカテゴリーを低学歴者とし、旧制中学校、新制高校卒以上を高学歴者群とし、学歴の高い、低い2つのカテゴリーにデータ加工した。

体力、健康、生活満足度尺度:「あなたは、自分は、健康で元気で暮らしていると思いますか。次の中で1つだけお答えください。」の回答選択肢として1, 非常に健康で元気だ。2, まあ、健康で元気だ。3, あまり、元気でない。4, 寝込んでいることが多いの4段階尺度で回答した選択肢の1, を4点, 2, を3点のよう

に尺度化した。体力尺度も、同様に行った。日常生活での満足度は、「あなたは現在の生活にどの程度満足しておりますか。それとも満足していませんか。」に対する回答を同じように尺度化した。

収入は、「あなた、またはあなたのご夫婦の収入は、年間およそいくら位ですか。」という質問に対する回答である。スポーツ活動は「あなたは、この1年間、余暇活動として運動・スポーツを行いましたか。行いませんでしたか。」1、全く行わなかった。2、行った。

という質問によった。平日の余暇活動については次のような質問によった。「あなたは1日の生活時間のうち、余暇として自由に使える時間は、平日と休日それぞれ、平均何時間ですか。平日（ ）時間、休日（ ）時間」居住地域については調査票では市街地、商業地など5地域に分けていたが単純集計の段階で有意な差がなかったので市街地とその他の2地域にデータ加工した。

Ⅲ. 結果と考察

(1) 高齢者の余暇活動の実態

余暇活動をどう定義するかはむずかしいが、ここでは拘束時間での活動を除いた自由時間に行われ、自発的意志による楽しみのために行われる趣味的活動を意味する。

a. 余暇時間

「あなたは一日の生活時間のうち、余暇として自由に使える時間は、平日と休日それぞれ、平均何時間ぐらいですか」という質問に対する回答の平均は、平日5時間14分、休日、6時間12分であった。これは、NHK国民生活時間調査(1990年度)の60歳代の自由時間、平日5時間27分、日曜日6時間38分とはほぼ同じ結果である[NHK, 1990:331]。

b. 過去1年間の余暇活動・特に力をいれている余暇活動・今後やりたい余暇活動

表2は「あなたは、この1年間にどんな余暇活動を行いましたか。表の中からいくつでも選んで下さい。」の質問に対し、19種類の余暇活

動から複数回答してもらった結果である。表3と表4はそれぞれ「表で選んだ活動の中で特にあなたが『力をいれている』活動はどれですか」という質問と「表の活動の中で今後『やりたい』余暇活動はどれですか」という質問に対する回答結果である。これら3つの表を比較しながら高齢者の余暇の実態を考察したい。

表2より、余暇活動としては行楽、旅行(48.7%)と園芸(盆栽、庭いじりなど、41.2%)のような戸外での活動が1、2位を占めている。テレビが3位である。しかし、表4の「特に力をいれている」活動ではテレビが14位であ

表2 1年間の余暇活動 (MA)

順位	余暇活動	%	N
1	行楽、旅行	48.7	494
2	園芸(盆栽、庭いじりなど)	41.2	418
3	テレビ	32.8	333
4	読書	31.1	316
5	運動、スポーツ	29.5	299
6	学習(講座、学習会など)	23.8	242
7	鑑賞、観戦(映画、スポーツなど)	17.5	178
8	音楽(演奏、歌、民謡)	17.4	177
9	工芸、手芸、陶芸など	14.6	148
10	創作(俳句、美術など)	12.7	129
11	稽古事(お茶、お花、踊りなど)	11.6	118
12	ゲーム(囲碁、将棋など)	10.0	102
13	カラオケ	8.7	88
14	ドライブ	8.1	82
15	その他	6.4	65
16	特にない	6.3	64
17	野外活動(釣り、キャンプなど)	5.9	60
18	ギャンブル(パチンコ、競馬など)	3.6	37
19	収集(切手、小銭収集など)	3.3	34
20	不明	7.2	73
	合計	100	1015

表3 今後やりたい余暇活動 (MA)

元の順位	余暇活動	%	N
1	行楽、旅行	37.0	376
2	園芸(盆栽、庭いじりなど)	32.2	327
4	読書	26.2	266
5	運動、スポーツ	22.2	225
6	学習(講座、学習会など)	20.8	211
8	音楽(演奏、歌、民謡)	15.8	160
10	創作(俳句、美術など)	15.0	152
9	工芸、手芸、陶芸など	13.1	133
3	テレビ	11.5	117
7	鑑賞、観戦(映画、スポーツなど)	11.1	113
11	稽古事(お茶、お花、踊りなど)	10.6	108
12	ゲーム(囲碁、将棋など)	8.2	83
13	カラオケ	7.5	76
17	野外活動(釣り、キャンプなど)	5.6	57
14	ドライブ	4.8	49
15	その他	3.1	31
19	収集(切手、小銭収集など)	2.9	29
16	特にない	2.5	25
18	ギャンブル(パチンコ、競馬など)	1.8	18
20	不明	22.8	231
	合計	100	1015

表4 特に力を入れている余暇活動 (SA)

元の順位	余暇活動	%	N
2	園芸 (盆栽、庭いじりなど)	14.7	149
5	運動、スポーツ	11.4	116
6	学習 (講座、学習会など)	6.6	67
10	創作 (俳句、美術など)	6.2	63
4	読書	6.2	63
1	行楽、旅行	6.0	61
8	音楽 (演奏、歌、民謡)	5.7	58
9	工芸、手芸、陶芸など	5.3	54
11	稽古事 (お茶、お花、踊りなど)	4.4	45
15	その他	3.1	31
12	ゲーム (囲碁、将棋など)	2.7	27
7	鑑賞、観戦 (映画、スポーツなど)	2.5	25
17	野外活動 (釣り、キャンプなど)	2.3	23
3	テレビ	2.1	21
16	特になし	1.5	15
13	カラオケ	1.2	12
18	ギャンブル (パチンコ、競馬など)	0.4	4
19	収集 (切手、小銭収集など)	0.2	2
14	ドライブ	0.1	1
20	不明	17.5	178
	合計	100	1015

り、テレビを見ることは手軽であるが、受動的、非活動的であり、高齢者にとって特に力を入れる活動とはなっていない。表4の「今後やりたい余暇活動」をみても、テレビは9位である。高齢者の余暇活動のうち、テレビは「今後やりたい余暇活動」と「特に力を入れている余暇活動」とともに順位が低く、やむおえず受動的に見ている余暇活動であることが推察される。1990年度のNHK国民生活時間調査によれば[NHK, 1990:330-331], 60歳代のテレビ視聴時間は平日4時間11分、日曜日、4時間26分である。スポーツの平日平均6分、日曜7分、趣味、稽古事31分及び32分などに比べ最も時間数は多いが、今後、高齢者の余暇活動がより活動的、創造的になるにつれ減少することが予想される。しかし、受動的、非活動的なテレビの視聴時間の減少のためには、高齢者の余暇活動が単なる閑つぶしの段階から、より質的に高い自己実現の段階へ引き上げられることが必要である。行楽・旅行は、「今後やりたい余暇活動」としては1位であるが、まとまった時間やお金などが必要なことから、「特に力を入れている活動」では6位と実際に実施するのが困難なことを示している。高齢者の今後の余暇活動は、園芸や読書、野外活動を含んだ運動・スポーツや創作活動など比較的手軽に出来、しかも心と体を創造的に働かすことが出来る活動が盛んになるものと予測される。

なるものと予測される。

c. 余暇活動を始めた年齢

表5より、特に力を入れている余暇活動を始めた年齢を見ると、60歳代以降になってから始めている人が多い。日頃行っている余暇活動として、「行楽、旅行」「園芸 (盆栽、庭いじり)」「読書」などが多いことから、高齢になってからでも比較的簡単に行うことが出来る余暇活動が自然と多くなるようである。スポーツを含め、その他の楽しみ事では、それを行うための最少限の技術やルール、マナーなどが要求される。レジャー活動における技術やマナー等は年齢が高くなってからでは困難であり、土肥〔土肥, 1995:1MO1-6〕も述べているように、学校で生涯教育としての余暇教育や消費者教育が大変重要であると考えられる。

表5 現在の余暇活動を始めた年齢

	%, 除不明	N
20歳代以前	9.20	76
20歳代	6.60	54
30歳代	7.00	58
40歳代	9.70	80
50歳代	20.40	168
60歳代以降	47.00	387
不明		192
合計		1015

d. 余暇活動を行うことに最も影響を与えた人

余暇活動は、本人の自由意志による活動ではあるが、間接、直接的に本人にそのきっかけを与える重要な他者が必要となる。調査結果より(表6)、余暇活動を行うことに最も影響を与えた人には友人や配偶者が多く、現在行っている余暇活動を始めた時期が60歳代になってから始めた者が多いことから、近隣の友人や日常生活を共にしている配偶者が余暇活動に影響を与えているようである。

表6 余暇活動への重要な他者

	%, 除不明	N
友人	32.6	254
配偶者	24.6	192
父母	8.5	66
先輩	8.3	65
近所の大人	5.9	46
先生	5.1	40
兄弟姉妹	2.3	18
親戚	0.9	7
その他	11.8	92
不明		235
		1015

(2) 余暇参与傾性尺度に影響する変数：林の 数量化Ⅱ類による分析

a. 外的基準と説明変数とのクロス集計

ここでの余暇参与傾性尺度とは、具体的に以下のような手続きにより、余暇参与傾性活発群と不活発群に分類することである。すなわち、「あなたは、この1年間にどんな余暇活動を行いましたか。表の中からいくつでも選んで下さい。」(表2参照)という質問にたいする複数回答の数(過去1年間の余暇活動数)と、「表の活動の中で今後『やりたい』余暇活動はどれですか。」という質問に対する複数回答の数(今後やりたいと思う余暇活動数)を合計する。この合計が平均値の8以上の者を活発群、平均未満の者を不活発群とした。(注:「過去1年間の活動数」と「今後やりたいと思う活動数」を同じ比重で扱うことは、行動レベルと行動意図レベルを混同しているようにとれる。しかし、「参与傾性」は行動レベルよりもむしろ、将来に向かって余暇に傾いていくという点を強調したために同じ重みづけをあえて試みた。実際「余暇是認尺度」は認知レベルでの尺度であるが余暇参与と関連が見られ、行動レベルと認知レベルとの合成変数はより余暇参与傾性を表すのに有効であることが仮定される。)

図2は、検討した11説明変数のうち、余暇参与傾性尺度(以下余暇尺度と表現する)と関連性が認められた7変数とのクロス集計結果をしめす。以下、関連性のあった項目についてみると生活満足度では、生活が不満足となるにつれて余暇尺度活発群の割合が減少している。学歴についてみると、余暇尺度活発群は学歴が高い傾向にある。体力については、余暇尺度活発群ほど体力が高い傾向にある。スポーツの実施状況についてみると、余暇尺度活発群ほどスポーツを実施している傾向にある。健康状態についてみると、余暇活発群は健康水準が高い傾向にある。年間所得では、収入の増加に伴い余暇尺度も高くなっている。居住地域についてみると、都市部では余暇尺度活発群の割合が多くなっている。

b. 外的基準、説明変数相互の偏相関係数、及びカテゴリスコアとレンジ

表7より、説明変数相互の偏相関係数を高い順にみると、健康状態と体力の間で最も高く、次いで、スポーツ実施と性別の間で高い。

外的基準と説明変数との偏相関係数を高い順にみると、余暇尺度と学歴の間で最も高く、次いで、余暇尺度と生活満足度の間で高かった。偏相関係数によっておよその傾向は分かるが、さらに詳しく余暇尺度を弁別していると考えられる要因を見るため、カテゴリスコア及びレンジを検討した。図3より、レンジの一番高かった説明変数は生活満足度であった。生活満足度が「非常に満足」の群はカテゴリスコアより、余暇参与傾性への積極性がうかがえる。逆に、生活満足度が低い群のカテゴリスコアからは、余暇参与傾性への消極性がうかがえる。2番目にレンジが大きい説明変数は学歴であった。学歴が高い群のカテゴリスコアより、余暇参与傾性への積極性がうかがえる。学歴の低い群のカテゴリスコアより、余暇参与傾性への消極性がうかがえる。3番目にレンジの大きい説明変数は性別であった。男性のカテゴリスコアが正の値を示し、女性は負の値となり、男性の方が余暇参与傾性が強いことがうかがえる。4番目にレンジの大きい説

(1) 生活満足度と余暇尺度

独立変数		従属変数	**→高いグループ	**→低いグループ	N
					100% ↓
生活満足度	非常に満足		*****53%*****	*****47%*****	167
	まあ満足		*****39%*****	*****61%*****	528
	不満足		*****29%*****	*****71%*****	62

$X^2=13.94$ ***:注

注:***は、 $P \leq 0.005$ で有意差、**は、 $P \leq 0.01$

(2) 学歴と余暇尺度

独立変数		従属変数	**→高いグループ	**→低いグループ	N
					100% ↓
学歴	高い		*****49%*****	*****51%*****	358
	低い		*****31%*****	*****69%*****	357

$X^2=24.23$ ***

(3) 体力と余暇尺度

独立変数		従属変数	**→高いグループ	**→低いグループ	N
					100% ↓
体力	高い		*****45%*****	*****55%*****	615
	低い		*****25%*****	*****75%*****	141

$X^2=18.48$ ***

(4) スポーツ実施と余暇尺度

独立変数		従属変数	**→高いグループ	**→低いグループ	N
					100% ↓
スポーツ実施	行なった		*****49%*****	*****51%*****	428
	行わない		*****25%*****	*****68%*****	306

$X^2=20.71$ ***

(5) 健康状態と余暇尺度

独立変数		従属変数	**→高いグループ	**→低いグループ	N
					100% ↓
健康状態	健康である		*****43.5%*****	*****56.5%*****	655
	健康でない		***23.8%***	*****76.2%*****	105

$X^2=14.54$ ***

(6) 夫婦の年間収入と余暇尺度

独立変数		従属変数	**→高いグループ	**→低いグループ	N
					100% ↓
年間所得	200万未満		*****41%*****	*****59%*****	363
	2-500万円未満		*****49%*****	*****51%*****	313
	500万以上		*****50%*****	*****50%*****	46

$X^2=13.48$ ***

(7) 居住地域と余暇尺度

独立変数		従属変数	**→高いグループ	**→低いグループ	N
					100% ↓
居住地域	都市		*****47%*****	*****53%*****	256
	その他		*****37%*****	*****63%*****	510

$X^2=6.8$ **

図2 余暇傾性尺度（従属変数）と独立変数とのクロス集計結果

表7 説明要因相互の偏相関係数、マトリックス表

	項目名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1	生活満足度	1.0000										
2	学歴	0.0014	1.0000									
3	性別	-0.0547	0.0354	1.0000								
4	体力尺度	0.1710	0.0099	0.0440	1.0000							
5	スポーツ実施	0.0595	0.0653	0.2077	0.0749	1.0000						
6	余暇是認度	0.0670	-0.0875	-0.0809	0.0394	0.0986	1.0000					
7	健康状態	0.0610	-0.0006	0.0174	0.5447	0.0279	-0.0078	1.0000				
8	余暇時間（平日）	-0.1017	-0.0075	-0.0903	0.0787	0.1200	-0.0667	-0.0663	1.0000			
9	年間所得	-0.0230	-0.1127	0.0664	-0.0128	0.0379	-0.1003	0.0147	-0.0254	1.0000		
10	居住地域	0.0620	0.1453	0.0237	0.0506	-0.0021	-0.0708	-0.0187	0.0380	-0.0785	1.0000	
11	仕事の有無	0.0024	0.0506	-0.2154	-0.0962	0.0094	-0.0720	0.0558	-0.1989	0.0841	0.1732	1.0000

判別的中率 64.9% 相関比 0.3373

図3 余暇参与傾性に影響している要因（数量化Ⅱ類，レンジ図）

明変数は体力であった。体力水準が高い群は低い群よりも余暇参与傾性の高いことがうかがえる。5番目にレンジの大きい説明変数はスポー

ツの実施についてであった。スポーツを実施している群の方が余暇参与傾性が高いことがうかがえる。6番目にレンジの大きい説明変数は余

暇是認度であった。余暇是認度で普通より高い値を示す群は余暇参与傾性の高いことがうかがえる。7番目にレンジの大きい説明変数は健康状態であった。健康だと答えた群の参与傾性は高いことがうかがえる。

IV. 結 論

クロス集計、林の数量化Ⅱ類の分析結果から、判別の中率、64.9%、相関比、0.3373で、高齢者の余暇参与傾性を判別する主な条件として次の7変数が抽出された。(注：相関比が0.3373は、低い値のように見えるが、多変量解析の場合、変数の数を殆ど質問項目全部を選択した場合に、この値は高くなる。しかし、本稿ではクロス集計、数量化Ⅱ類を変数の数を変えながら何回も行って7変数に絞り込んだためこのような値になったと思われる。数量化分析の場合、社会科学においては相関比の値よりも抽出された変数がむしろ重要と考える。このような分析が可能となったのは、大型計算機よりも手軽でしかも大量のデータが分析可能となったパソコンと集計ソフト(社会情報サービス、「秀吉」)の結果であろう。

1) 日常生活全体を通した内面的な満足(カテゴリースコアレンジ=0.64), 2) 高学歴(同, レンジ=0.42), 3) 性(レンジ=0.24), 4) 体力尺度(レンジ=0.22), (5) スポーツの実施(レンジ=0.22), (6) 余暇是認尺度(レンジ=0.21), (7) 健康状態(レンジ=0.21)

従来言われていた、暇や金(所得)は、余暇の参与傾性に一般成人ほど強い要因にはなっていないことが明らかとなった。今後、余暇への積極的な社会化を促すためには、余暇を行うのに十分な生活全般の内面的な満足や身体的体力、健康度や余暇に対する是認的態度、日頃からの余暇活動が必要であることを示唆している。

このような条件は、短期間では達成が難しく、幼少期から高齢期までの生涯余暇学習と言ったような、長いライフ・ステージを通しての多様な余暇活動への準備が必要と考える。

追記：本論は、平成元年～3年度、文部省科学研究費補助金一般(C)課題番号01580106の一部であり、第64回日本社会学会大会の発表要旨[深澤, 1991:212-213]を加筆、修正したものである。

引用及び参考文献

- 青井和夫, 1975, 「SocializationとIntegrity」, 『日本教育社会学会第27回大会発表要旨 集録』, 80-82.
- 安食正夫, 他, 1978, 『高齢化社会への対応』, ドメス出版 12-52
- 我孫子藤吉, 他, 1990, 『高齢化社会基礎資料年鑑 '90/'91年版』, 中央法規出版.
- 荒井貞光, 1995, 「高齢社会における体育学の役割」, 日本体育学会編, 『第46回, 日本体育学会大会号』, 63
- NHK放送文化研究所編, 1990, 『国民生活時間調査(1990年度)』, 日本放送出版協会
- Erikson, E. H. et al., 1986, *Vital Involvement in Old Age.*, Norton
- 折原 肇 編, 1992 『新老年学』, 東京大学出版会
- Kaplan, M., 1960, "The Use of Leisure", in Tibbitts, C.(eds.), *Handbook of Social Gerontology: Societal Aspects of Aging*, The University of Chicago Press. 407-435.
- 菅 民郎, 1990, 『パソコン統計処理(下)』, 技術評論社.
- Crandall, R. & Slivken, K., 1979, "The Importance of Measuring Leisure Attitudes", *Newsletter of The Association for the Anthropological Study of Play*, Vol. 5. Num. 4 Spring, 1979, 19-24.
- Kenyon, G. S. & McPherson, B. D., 1973, "Becoming Involved in Physical Activity and Sport: A Process of Socialization", in Rarick, G. L. (eds.) *Physical Activity: Human Growth and Development*, Academic Press, 303-332.
- Kelly, J. R. & Steinkamp, M., 1987, "Later Life Satisfaction: Does leisure Contribute?" *Leisure Sciences* 9: 189 - 200.
- 沢田和明, 1989, 「高齢者の健康や体力と運動からみた高齢者の生活実態」, 滋賀県体育協会, 『滋賀県体育協会スポーツ科学委員会紀要』, No.9, 128-142
- シモヌ・ボーヴォワール, 朝吹三吉訳, 1972, 『古い

- (下)』, 人文書院.
- Tunstall, J., 1978. *Old and Alone: A Sociological Study of Old People*, Routledge & Kegan Paul. 日本語版『老いと孤独』, 光信隆夫訳, 垣内出版, 1978.
- 高見 彰, 山口泰雄, 土肥 隆, 1995, 「高齢期の余暇生活に関する研究 (1) —高齢者予備軍としての中高年者の場合—」, 日本体育学会体育社会学専門分科会, 『体育社会学専門分科会発表論文集』1MO1-1-1MO1-6.
- 辻 功, 1975, 『教育調査法』, 誠文堂新光社.
- 長見 真, 嘉戸 脩, 宮内孝知, 菊 幸一, 雨宮輝也, 1992, 「中高年スポーツ参加者のスポーツ・キャリアパターンについて—第4 回全国スポーツ・レクリエーション祭参加者の調査から—」, 日本体育学会, 第43 回大会発表資料
- 那須宗一, 1987 年, 『高齢化社会と余暇に関する研究』, 余暇開発センター
- 深澤 宏, 1983, 「成人の余暇活動に関する実証的研究」, 体育・スポーツ社会学会編, 『体育・スポーツ社会学研究』, 2, 45-69
- 深澤 宏, 1991, 「高齢者の余暇参与に及ぼす要因に関する実証的研究」, 日本社会学会編, 『第64 回, 日本社会学会大会報告要旨』, 212-213.
- 皆川鞆一, 「高齢者の社会参加と生涯教育」, 室 俊司, 大橋謙策 編, 1985, 『高齢化社会と教育』, 中央法規出版, 217-240.
- 宮内孝知, 長見 真, 嘉戸 脩, 菊 幸一, 雨宮輝也, 1992, 「中高年スポーツ参加者のスポーツ・キャリアパターンについて—第4 回全国スポーツ・レクリエーション祭参加者の調査から—」, 日本体育学会, 第43 回大会発表資料
- 宮下充正, 1995, 「老化の遅滞と成長の促進を図る体育学」, 日本体育学会編, 『第46回, 日本体育学会大会号』, 62
- Mobily, K.E., 1987, "Leisure, Lifestyle, and Life Span." in MacNeil, R. D. and Teague, M. L. (eds.) *Aging and Leisure: Vitality in Later Life*, N. J. Prentice Hall. 155-180
- 谷口幸一, 1993: 日本体育学会編「高齢者の日々の運動実施に影響する心理・社会的要因の検討」, 『体育学研究』第38 卷, 第2 号, 99-111.
- 山口泰雄, 1994, 「生涯スポーツの基本的考え方—ライフサイクルと生涯スポーツ—」, 文部省体育局, 『スポーツと健康』, Vol.26 No.6, 66-69.
- 横山 宏, 1961, 「老人の見方考え方」, 生活科学調査会, 『老後問題の研究』, ドメス出版. 17-41.
- Johan Huizinga, *Homo Ludens: Study of the Play Element in Culture*, Temple Smith, London, 1970.